

クラス番号	608	担当教員名	北村 育子
テーマ	今の暮らしを最後まで：高齢者の終末期を支える		
著書・論文	特別養護老人ホームで働くケアワーカーと看護師の終末期ケア行動の分析：両職種の専門性にもとづく協働の可能性『日本福祉大学社会福祉論集』122号 25-39頁、2010年（北村育子・石井京子・牧洋子）		
研究課題等	エイジング・イン・プレイスを果たすための条件に関する一考察：小規模多機能事業と認知症グループホームを併設する事業所を対象とした調査の結果から『日本福祉大学社会福祉論集』128号 7-22頁、2013年（北村育子・永田千鶴）		
	エイジング・イン・プレイスを果たす認知症高齢者ケアモデルの開発：地域密着型介護老人福祉施設（特別養護老人ホーム）におけるケアサービスの探求『熊本大学医学部保健学科紀要』9号 39-51頁、2013年（永田千鶴・北村育子・本郷秀和・東清巳・松本佳代・松本千晴）		

ゼミナール概要

キーワード：死 看取り 終末期 教育

目的：

総務省の住民基本台帳に基づく人口・人口動態および世帯数に関する調査によると、2013年3月末時点での高齢化率は24.4%、団塊の世代が高齢者となり、我が国は「多死時代」を迎えますが、死は高齢者にだけ訪れるわけではありません。

高齢者は若い人たちよりも死に近い存在ですが、認知症などで自分の意思を明確に伝えることができなくなって後に死に直面すると、家族や施設の職員がその人に代わって「死に方」を判断しなければなりません。突然の事故でこん睡状態に陥ったりすれば、同じ状況が生まれます。現在、大多数の人は病院など医療機関で亡くなっていますが、高齢化に伴う社会保障負担を少しでも軽くするために、死に至るまでの療養期間を含め、医療機関の利用の仕方を見直そうという動きが始まっています。家族や施設職員にとっては重い決断を迫られることになりますが、周囲の負担を軽くするために、あるいは他者に「迷惑をかけないため」の死に方について考えるということがこのゼミの本来の目的ではありません。ただし、このような医療費をめぐる財政事情に関係なく、人は死ぬように運命づけられており、何時死ぬかはわかりませんが、どのように死ぬかを考えておくことは良いことです。

自分の死について考えることは自分が今をより良く生きることについて考えることであり、家族を含め親しい人の死について考えることは、それらの人々を大切にすること、そしてその結果として、死ぬ瞬間まで自分の生きたいように生きることができるようにすることです。

高齢者福祉の現場では、職員による看取りを実践している特別養護老人ホームや認知症のグループホーム、自宅での看取りを支援する小規模多機能事業所などが増えてきています。また、自宅で亡くなるがん患者を支援する医師や訪問看護ステーションもあります。しかし、増えてきているとはいえ、これらの施設や事業所はまだまだ少数派で誰もが容易に利用できるまでには至っていないことも確かです。理由の一つは、私たちにとって「死が身近でないこと」が挙げられます。このゼミでは、自分と親しい人の死をより身近なものとし、人生の終末期にある人を支えることができるようになることを目標として、共に学びます。

授業計画：

[3年次] 死や死の準備に関する文献を読みすすめます。毎回、購読した内容について読書メモを作成し、ゼミで報告していただきます。後期には、4年次の卒論執筆を念頭に置きながら、各自が関心を絞っていきます。

[4年次] 卒論のテーマを確定し、構成を考え、書きすすめていくことになります。その過程を、毎回のゼミで報告し、互いに評価・検討することを繰り返します。

担当教員からのメッセージ

2年間、同じメンバーが互いに協力することなしにゼミは成立しません。また、ゼミはただの仲良しクラブではなく、学びを通じた仲良しクラブです。準備としての購読と、ゼミを通じて自分の学びが深まっているという感覚がなければ、ゼミの時間が苦痛になってしまいます。この点を十分に理解した上で参加してくださいよう、お願いします。